

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 251

馬場崎遺跡

県立邑久高等学校格技場・合併処理槽建設に伴う発掘調査

2020

岡山県教育委員会

序

岡山県の南東部に位置する瀬戸内市は、平成16（2004）年に邑久町、長船町、牛窓町の3町が合併して誕生しました。中国山地に源を発する吉井川の流れは、千町平野と呼ばれる穀倉地帯や備前刀のような伝統的産業を育み、島々に囲まれて波穏やかな牛窓湾は、朝鮮通信使をはじめとする国際交流の舞台となりました。交通網が整備された現在は、岡山市近郊の住宅地として発展しています。

この瀬戸内市にある県立邑久高等学校は、大正10（1921）年に創立された邑久実科高等女学校に始まり、現在は約400名の生徒が学んでいます。平成5年、岡山県教育委員会ではこの邑久高等学校に格技場及び合併処理槽の建設を計画しましたが、遺跡の存在が予想されたことから事前に発掘調査を実施しました。調査の結果、弥生時代中期の井戸や鎌倉時代の土坑などを確認し、この一帯に広がる集落遺跡の一端が明らかとなりました。また、江戸時代の水田の下から見つかった地割れの跡は、地震による液状化の痕跡と判断され、過去の災害を伝える貴重な資料と言えます。

本書がこの地域の歴史研究の資料として活用されることを期待いたします。

発掘調査に当たりましては、県立邑久高等学校や邑久町教育委員会（当時）、地元住民の皆様にご理解・御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和2年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 向井重明

例 言

- 1 本書は、岡山県教育委員会による県立邑久高等学校格技場・合併処理槽建設に伴い、岡山県古代吉備文化財センターが実施した、馬場崎遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 馬場崎遺跡は、岡山県瀬戸内市邑久町尾張404に所在する。
- 3 発掘調査は、平成5年4月19日～5月21日に、文化財センター職員 宇垣匡雅が担当して実施した。調査面積は215㎡である。
- 4 本書の作成は、令和元年度に、文化財センター職員 亀山行雄が担当した。
- 5 本書の執筆は、第3章第2節の一部を文化財センター職員 物部茂樹が、その他を亀山が行った。
- 6 本書の編集は亀山が行った。
- 7 本書の遺構写真は宇垣が撮影した。また、遺物写真の撮影に当たっては江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 8 本書に記載した遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山県岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 本書に用いた高度は海拔高である。
- 2 本書に用いた北方位は磁北である。
- 3 本書に記載した遺物図の縮尺は、土器・陶磁器を1/4、石製品を1/2・1/3、土製品を1/3に統一している。
- 4 本書に記載した遺物図には、石製品にS、土製品にCの記号を番号の前に付した。
- 5 遺物の観察表に記載した色調は、「新版標準土色帖」による。
- 6 本書に記載した周辺遺跡分布図は、国土地理院発行1/50,000「和気」・「西大寺」を複製して使用した。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 序 説	1
第1節 遺跡を取り巻く環境	1
第2節 調査の経緯と経過	3
第2章 調査の概要	5
第1節 概 要	5
第2節 格技場調査区	5
第3節 合併処理槽調査区	14
第3章 総 括	15
第1節 遺構・遺物をめぐる問題	15
第2節 発掘された地震痕跡	18
遺物観察表	20
報告書抄録	22
図版	

目 次

第1図	遺跡位置図 (1/1,500,000) ……………	1	第10図	土坑1 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	11
第2図	周辺遺跡分布図 (1/60,000) ……………	2	第11図	土坑2～4 (1/30)、溝1 (1/50)・出土遺物 (1/4) ……………	12
第3図	調査区配置図 (1/2,500) ……………	3	第12図	その他の遺物 (1/4・1/3・1/2) ……………	13
第4図	格技場調査区トレンチ配置図 (1/200) ……	5	第13図	合併処理槽調査区トレンチ配置図(1/200)・土層断面図 (1/50) ……………	14
第5図	格技場調査区北・南トレンチ (1/100) ……	6	第14図	馬場崎遺跡の地震痕跡 ……………	18
第6図	井戸1 (1/30)・出土遺物1 (1/4) ……	7	第15図	総社遺跡の地震痕跡 ……………	18
第7図	井戸1出土遺物2 (1/4) ……………	8			
第8図	井戸1出土遺物3 (1/4) ……………	9			
第9図	井戸1出土遺物4 (1/4・1/3・1/2) ……	10			

図 版 目 次

図版1	1 格技場調査区全景 (西から)	3 土坑2上層 (南西から)
	2 格技場調査区調査状況 (南東から)	4 土坑2下層 (南西から)
図版2	1 格技場調査区北トレンチ全景 (西から)	5 格技場調査区西トレンチ全景 (北西から)
	2 格技場調査区南トレンチ全景 (南東から)	図版5
図版3	1 井戸1遺物出土状況 (北東から)	1 合併処理槽調査区調査状況 (北から)
	2 井戸1完掘状況 (北東から)	2 合併処理槽調査区土層断面 (北西から)
図版4	1 土坑1 (北東から)	図版6
	2 土坑3 (北東から)	出土遺物1
		図版7
		出土遺物2
		図版8
		出土遺物3

第1章 序 説

第1節 遺跡を取り巻く環境

岡山県の南東部に位置する瀬戸内市は、平成16（2004）年に邑久郡を構成する邑久町・長船町・牛窓町が合併して誕生した。その中央に位置する邑久町は、東西約22km、南北約7km、人口約19000人を数え、市役所や市立図書館、市民病院が置かれるなど、瀬戸内市の中核をなしている。標高100～200mの丘陵が連なる東部に対し、西部は吉井川と千町川が形成した肥沃な平野が広がる。北を高砂山、南を大雄山、西を高山といった丘陵で囲まれ、東を吉井川で区切られるこの平野は、一つの単位地域をなしている。

後水期の縄文時代に入って海水面が上昇すると、ここに内湾が形成され、周囲の丘陵裾部には山田庄宮下貝塚（前期～後期）・真徳貝塚（後期）・大橋貝塚（前～後期）・円張東貝塚（後～晩期）などの貝塚が営まれる。また、長船町の吉井川河床では、約5000年前の埋没林が見つかっており、周囲には落葉広葉樹の森が広がっていたようである。しかし、海水面が低下に転じると、吉井川的作用によって笠加から豊原に至る砂州状の自然堤防が形成される。ここに営まれた堂免遺跡（晩期）や助三畑遺跡（晩期）などでは、いち早く沖積地に進出した人々の足跡をうかがうことができる。

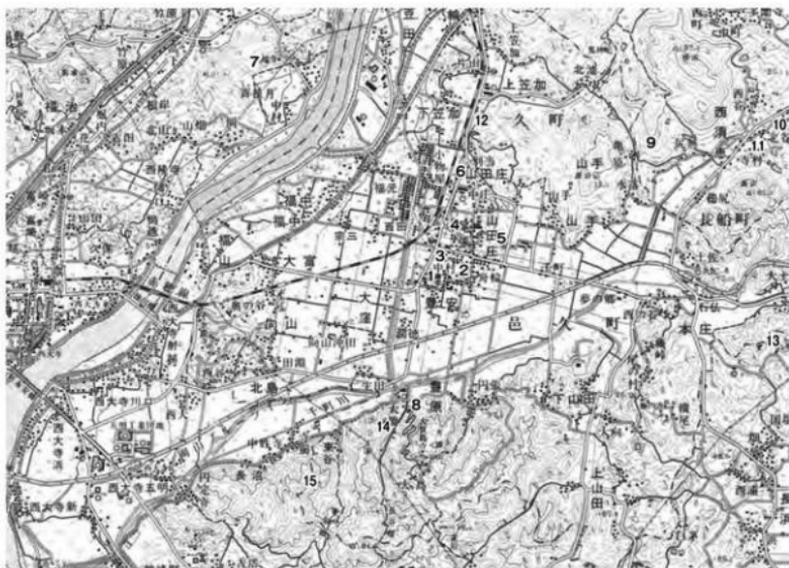
弥生時代になると、この自然堤防上に本格的な集落が展開される。弥生時代の貝塚として早くに注目された門田貝塚は、前期の溝や中期の土坑、後期の竪穴住居などからなり、下層から出土した土器はこの地域における前期新段階の指標となっている。南側の堂免遺跡は前期から後期の集落跡で、中期の竪穴住居、掘立柱建物、井戸のほか円形周溝墓が検出されている。

古墳時代に入っても引き続き集落が営まれるが、花光寺山古墳（全長約100m）や鶴山丸山古墳（全長約60m）・築山古墳（全長約90m）が築かれた香登・長船平野、牛窓天神山古墳（全長約90m）・黒島古墳（全長約70m）・鹿歩山古墳（全長約80m）などが築かれた牛窓湾沿岸に比べると、有力な首長墓は見当たらず、集落の分布とは不均衡な様相を示している。古墳時代後期には西部の丘陵地で須恵器生産が始まり、飛鳥時代にかけて130基もの窯からなる邑久古窯址群が築かれている。

飛鳥時代には、千町川の上流に須恵廃寺・服部廃寺が建立され、貴船山西麓にも半田廃寺が想定されている。これらの寺院には中央寺院や宮都との繋がりが認められ、かつて吉備の中核を形成した上道郡の諸寺とは様相を異にする。令制下の邑久郡は「和



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)



- | | | | | |
|---------|---------|----------|---------|-----------|
| 1 馬場崎遺跡 | 2 助三畑遺跡 | 3 堂免遺跡 | 4 門田貝塚 | 5 山田庄北畑遺跡 |
| 6 熊山田遺跡 | 7 銅鐸出土地 | 8 大橋貝塚 | 9 金堀塚古墳 | 10 築山古墳 |
| 11 須恵廃寺 | 12 半田廃寺 | 13 寒風窯跡群 | 14 砥石城跡 | 15 高取山城跡 |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/60,000)

名抄」によると邑久、靱負、土師、須恵、長沼、尾沼、尾張、柗梨、石上、服部の10郷からなり、備前国の9郡中では最も郷数が多い。このうち馬場崎遺跡が位置する尾張郷は、平安時代に天皇家の料所として開かれた豊原荘に加納され、備前国が東大寺再興の料国とされた鎌倉時代には、東大寺のほか石上神社、上加茂神社といった天皇家と繋がりのある寺社に寄進されている。

室町時代になると、備前守護赤松氏の守護代として三石城・天神山城にあった浦上氏の支配するところとなる。その麾下から台頭した宇喜多氏は、金川城の松田氏や天神山城の浦上氏を追って備前の支配を固め、豊臣政権下では五大老の一人として重きをなした。慶長5（1600）年、関ヶ原合戦に敗れた宇喜多氏に代わって小早川氏が入封するもののわずか3年で断絶し、池田氏が岡山城に入る。池田忠雄は、神崎・乙子に新堀を開削して千町川の排水機能を高めた。しかし、川幅の狭さから依然として排水力の不足に悩まされ、近年まで浸水被害が繰り返されている。

明治22（1889）年、尾張、豊安、山手、山田庄の4村が合併した邑久村は、昭和27（1952）年に笠加、福田、今城、豊原、本庄の5村と合併して邑久町が誕生した。JR赤穂線や岡山ブルーラインが東西に走り、瀬戸内市となった現在では、都市近郊の住宅地として発展している。

参考文献

- ・「邑久町史 考古編」瀬戸内市、2006
- ・「邑久町史 通史編」瀬戸内市、2009

第2節 調査の経緯と経過

1 調査の経緯と経過

県立邑久高等学校は、大正10（1921）年に邑久実科高等女学校として開校して以来、100年を迎える普通科単科の高等学校で、現在、約400名の生徒が学んでいる。南北210m、東西200mの校地は、瀬戸内市役所の南、市立中央公民館の西に位置しており、市街地の一画を占めている。

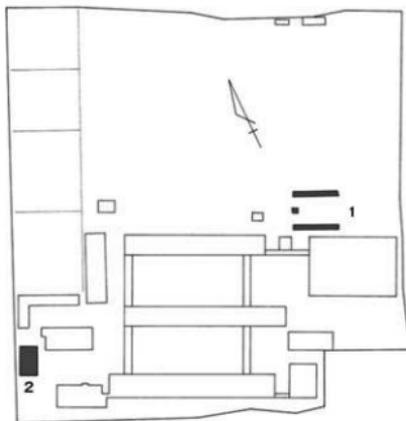
この一帯は、かねてから熊山田散布地として周知されていたが（「岡山県遺跡地図」第二分冊 昭和49年刊）、昭和56（1981）年に老人憩の家、翌年に邑久町保健センター・中央公民館建設に伴い実施された発掘調査によって弥生時代～中世に営まれた集落遺跡（助三畑遺跡）の存在が明らかとなり、隣接する邑久高等学校もその一部と推測された（「全国遺跡地図」岡山県 昭和60年刊）。

平成5（1993）年、邑久高等学校において体育館の北側に格技場、校地の南西隅に合併処理槽の建設が計画されたが、遺構の存在が予想されたため、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。調査は、岡山県古代吉備文化財センター調査第一課の宇垣匡雅が担当し、4月19日から重機を使用して造成土を除去した後人力で掘り下げを行い、5月21日に終了した。調査の結果、合併処理槽調査区では弥生土器が出土したものの遺構は確認できなかったが、格技場調査区では弥生時代の井戸や鎌倉時代の柱穴・土坑を検出した。しかし、助三畑遺跡との関係が明らかでないことから、調査地点の小字名をとって馬場崎遺跡と呼称することとした。

2 整理の経過

出土物の洗浄・注記は調査後まもなく実施されたが、監督者不在のまま行われたため、遺物の一部に誤った注記がなされたり出土地点が不明になるなどの混乱を生じた。同様の事態は、平成5年に県立備前高等学校の施設整備に伴って発掘調査を実施した備前市長瀬手遺跡の遺物整理でも起こっており、今後の戒めとしてここに明記しておく。

平成31年4月から、未刊行のままとなっている報告書の作成を進めることとなり、その手始めとして馬場崎遺跡の整理作業に着手した。しかし、整理費の手当てがなされていないため、出土遺物の復元・実測から遺構・遺物図面の浄書まで全ての作業を担当者が行うこととなり難渋したが、10月末に概ね完了できた。



1 格技場調査区 2 合併処理槽調査区

第3図 調査区配置図 (1/2,500)

3 調査と整理の体制

平成5年度（発掘調査）		文化財保護主事	宇垣 国雅 （調査担当）
岡山県教育委員会			
教育長	森崎岩之助	令和元年度（報告書整理）	
岡山県教育庁		岡山県教育委員会	
教育次長	岸本 憲二	教育長	鍵本 芳明
文化課		岡山県教育庁	
課長	渡辺 淳平	教育次長	高見 英樹
課長代理	松井 新一	文化財課	
課長補佐（埋蔵文化財係長）	高畑 知功	課長	大西 治郎
文化財保護主事	亀山 行雄	参事（文化財保存・活用担当）	横山 定
岡山県古代吉備文化財センター		総括副参事（埋蔵文化財班長）	柴田 英樹
所長	横山 常實	主幹	河合 忍
次長	葛原 克人	主任	原 珠見
〈総務課〉		岡山県古代吉備文化財センター	
課長	北原 求	所長	向井 重明
課長補佐（総務係長）	小西 親男	次長（総務課長事務取扱）	佐々木雅之
主査	石井 茂・石井 善晴	参事（文化財保護担当）	大橋 雅也
主任	三宅 秀吉	総括参事（調査第二課長事務取扱）	亀山 行雄 （整理担当）
〈調査第一課〉		〈総務課〉	
課長	正岡 睦夫	総括主幹（総務班長）	甲元 秀和
課長補佐（第一係長）	松本 和男	主任	東 恵子・多賀 克仁
文化財保護主査	桑田 俊明		
文化財保護主任	楨野 芳典		

4 日誌抄

平成5年	6月7日（金）	遺物実測終了
4月19日（月）	6月10日（月）	遺構図面整理着手
表土除去、調査開始	6月28日（金）	遺構図面整理・遺物復元終了
4月20日（火）	7月1日（月）	遺構・遺物図トレース着手
格技場調査区調査着手	7月11日（木）	遺物写真撮影着手
4月23日（金）	7月31日（水）	遺物写真撮影終了
合併処理槽調査区調査終了	8月30日（金）	遺構・遺物図トレース終了
5月20日（木）	原稿執筆着手	
格技場調査区調査終了	10月31日（木）	原稿執筆終了、整理終了
5月21日（金）		
調査終了		
平成31年		
4月1日（月）		
遺物復元着手、整理開始		
令和元年		
5月10日（金）		
遺物実測着手		

第2章 調査の概要

第1節 概要

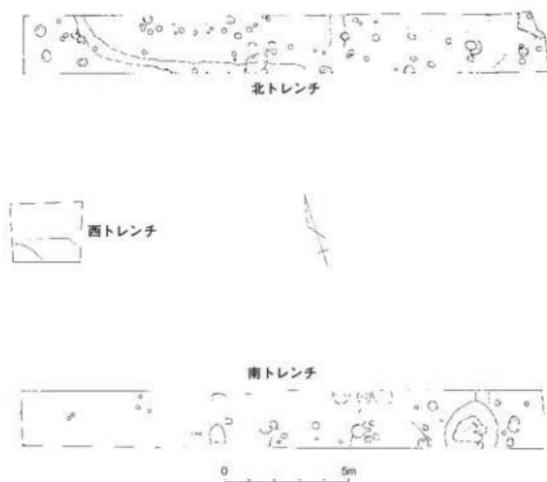
格技場は、体育館北側に新設される 18.35×14.85 mの建物で、基礎が設置される北・南辺について 20×2 m、西辺の一部について 2.5×2 mのトレンチを設定し掘り下げを行った。北トレンチでは、弥生時代の土坑や鎌倉時代の柱穴・溝を検出したほか、東端で地震痕跡と見られる砂の詰まった地割れを確認した。南トレンチでは、東側で弥生時代の井戸を確認したほか、鎌倉時代の土坑・柱穴などを検出している。西トレンチでは、鎌倉時代の溝・土坑を検出した。

校地の南東隅に計画された合併処理槽については、 15×10 mにわたって深さ1mほど重機により掘削した上、さらに深く構造物が設置される西半部にトレンチを3本設定し、人力で掘り下げを行った。その結果、8層で摩滅した弥生土器片が出土したものの、遺構は確認できなかった。

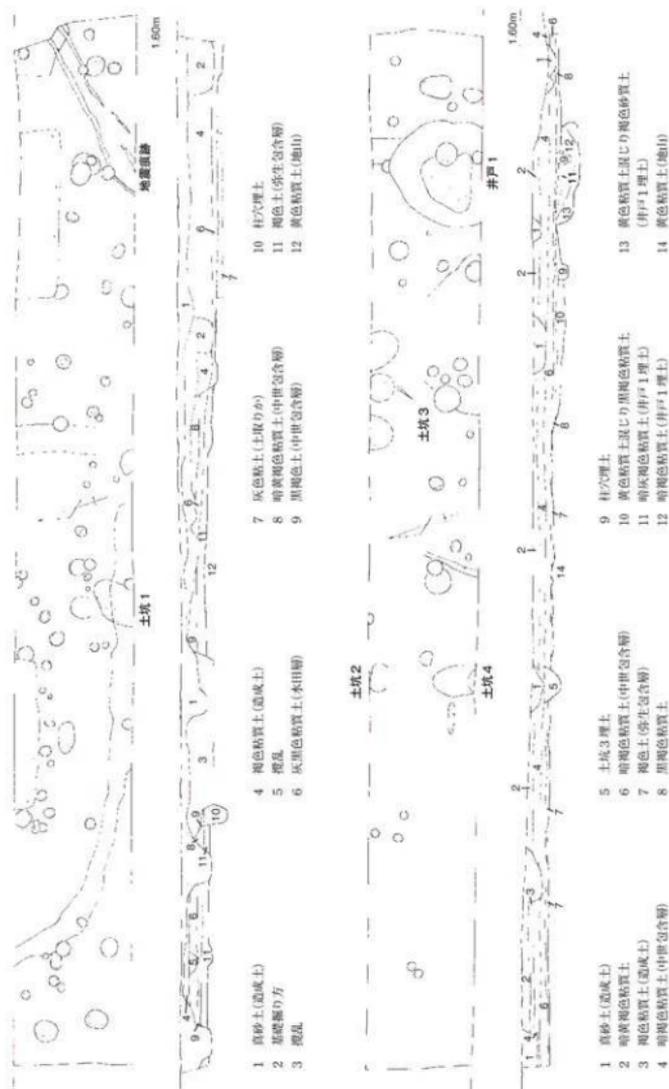
第2節 格技場調査区

井戸1（第5～9図、図版3・6～8）

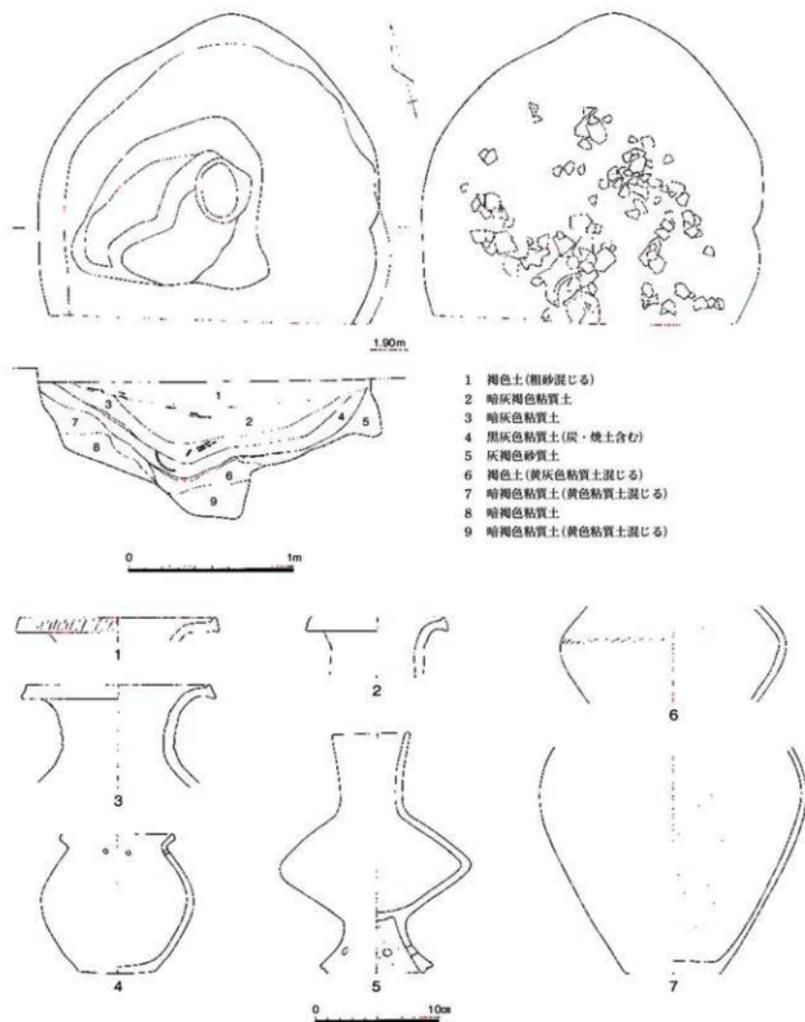
南トレンチ東側の南壁にかけて検出した。東西は207cm、南北は260cmほどに復元される楕円形の



第4図 格技場調査区トレンチ配置図（1/200）

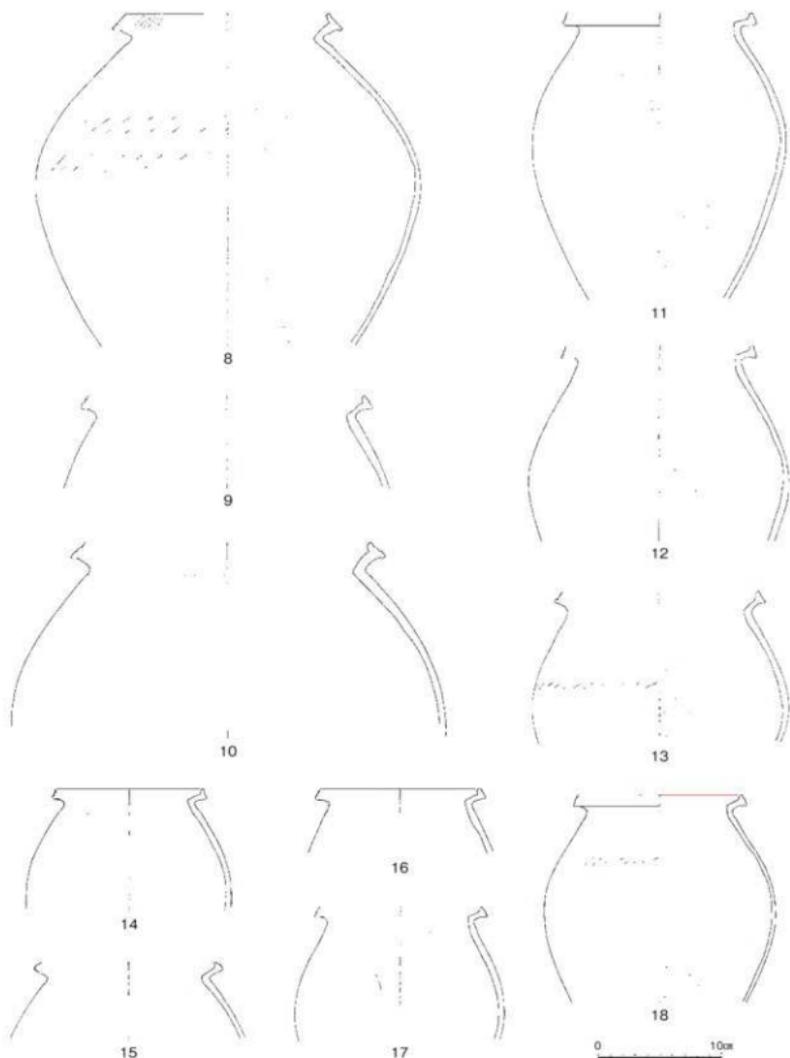


第5図 格技場調査区北・南トレンチ (1/100)



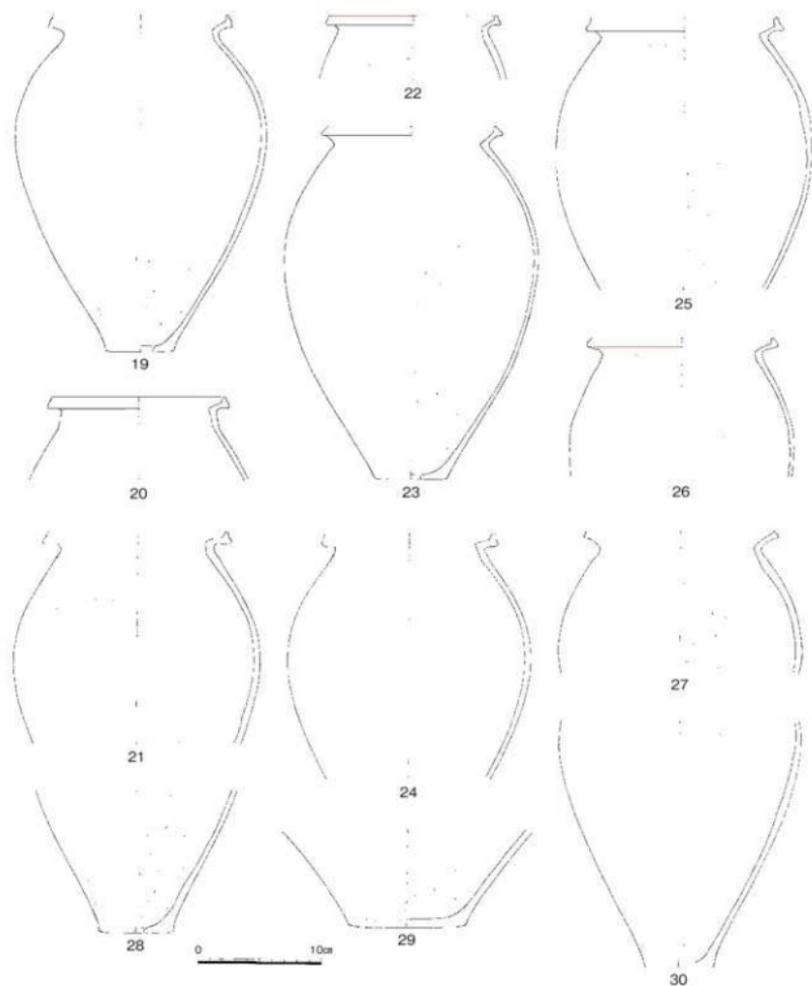
第6図 井戸1 (1/30)・出土遺物1 (1/4)

土坑である。標高1.73mの検出面から急な傾斜をもって掘りこまれており、南東側の壁面はわずかに内傾する。底面は緩やかにくぼみ、中央西よりに見られる不定形な落ち込みは標高0.9mの砂層にまで達している。埋土は、粗砂が混じる上層、炭化物の薄層を挟みながら堆積する粘質土の中層、地山土塊が混じる下層の3層に大別され、遺物は主に中層から出土した。



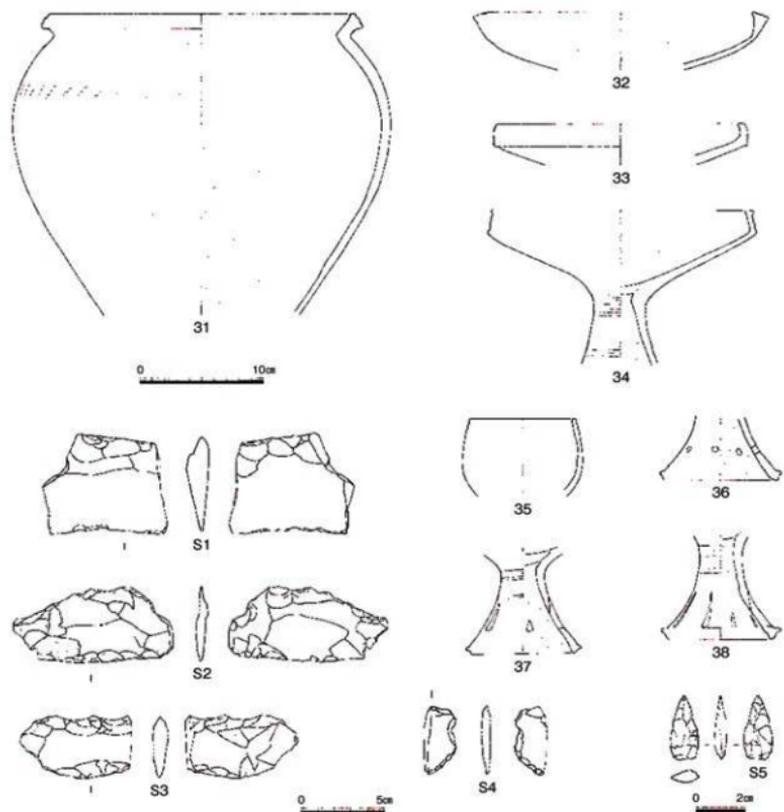
第7図 井戸1出土遺物2 (1/4)

出土遺物には弥生土器のほかに石器がある。1～8は壺である。下層から出土した1は水平に広がる端部に刻み目を施しており、口縁部や頸部に凹線をめぐらす2・3より古相を示す。4は頸部に一对の穿孔を二か所に施す短頸壺、5は算盤玉形の胴部に脚台を備えた直口壺である。8は張りのある



第8図 井戸1出土遺物3 (1/4)

体部を持つ壺で、肩に刺突文を2段にめぐらす。甕には口径22.2~23.2cmの大形(9・10)と、口径11.7~16.4cmの小形(11~27)がある。9~20は端部を短く上方に拡張した口縁部に凹線をめぐらせ、11~30は横ナデで調整する。いずれも体部下半の内面をヘラ削りする。27は外反する口縁部を持つ甕で、内面は頸部近くまでヘラ削りする。31は口径24.4cmを測る鉢で、肩部に二枚貝による刺突文を施す。高杯には、皿状の体部から緩やかに立ち上がる口縁部を持つ32と、屈折して直立する口縁部を持つ33・34、深い椀形の杯部を持つ35がある。27は肥厚した口縁端部に、33・34は口縁部外面に凹線を



第9図 井戸1出土遺物4 (1/4・1/3・1/2)

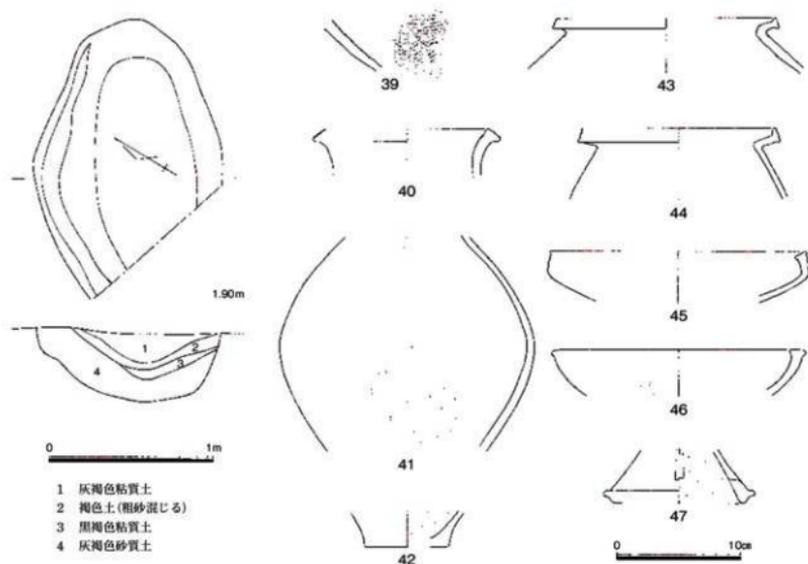
めぐらす。脚部には三角形の透かしを飾る37・38と円孔を穿つ36とがある。これらは、壺・甕に凹線を飾るものが多く内面のヘラ削りも多用されること、高杯に口縁部が直立するものと緩やかに立ち上がるものが見られることなどから中期後葉の古段階に位置づけられる。

石器はいずれもサヌカイト製で、穂摘み具と見られるS1～4と石鏃S5がある。S1～4はいずれも折損しており、刃部に光沢が認められる。

土坑1 (第5・10図、図版4)

北トレンチの中央で南壁にかけて検出した。幅115cm、長さ170cm以上の楕円形に復元される。急な角度で深さ45cmほど掘りこまれており、標高1.29mを測る底面は比較的平坦である。

39は壺の肩部で、櫛描き文を飾る。40は壺の口頸部で、僅かに開く口縁端部には凹線文をめぐらす。41は張りのある体部を持つ壺で、内面下半をヘラ削りする。43・44は甕の上半部で、いずれも口縁端部に凹線文を施す。高杯には、口縁部が直立する45と緩やかに立ち上がる46、方形の透かしを穿つ47



第10図 土坑1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

がある。これらは井戸1の弥生土器と似た様相を持ち、中期後葉の古段階に位置づけられる。

土坑2 (第5・11図、図版4・8)

南トレンチの中央西よりにおいて北壁にかけ検出した土坑で、井戸1の西9mに位置する。南半を失っているが、現状で長さ83cmを測り、楕円形に復元される。検出面からの深さは35cmあり、褐色の埋土から瓦器碗と土師器杯・皿が出土した。

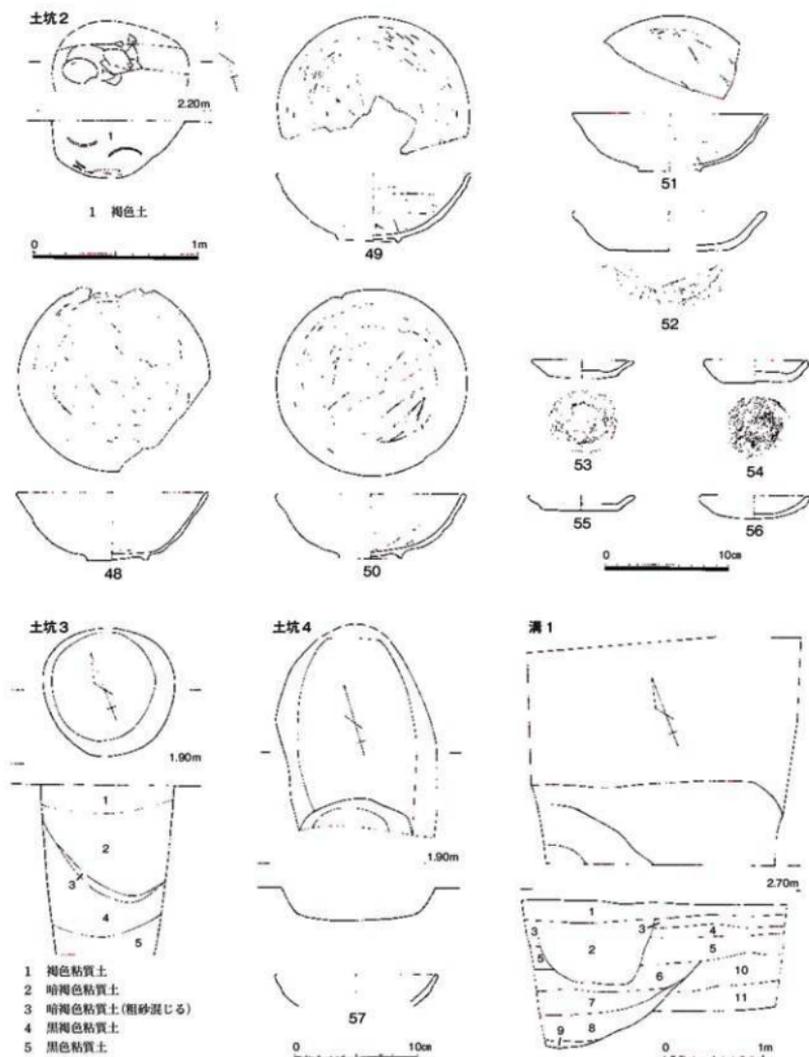
4点ある瓦器碗は口径15.0～15.6cm、器高5.0cmを測り、48・50はほぼ完形である。口縁部は横ナデし、体部には指押さえの痕が残る。見込みには斜格子、その周りには圏線状の暗文を粗く施す。底部に貼り付けた高台は低く、その断面は三角形をなす。和泉型のⅡ期3段階にあたり、12世紀後半に位置づけられる。土師器の小皿は4点ある。口径7.8～8.4cm、器高1.2～2.0cmを測る53～55は、底面をヘラ切りする。56は口径8.6cmを測る手握ぬの小皿である。

土坑3 (第5・11図、図版2)

南トレンチの中央東よりで検出した土坑で、井戸1の西3.2mに位置する。径79cmの円筒形をなし、深さ104cmまで掘り下げたが底を確認できなかった。内部には黒褐色粘質土が堆積し、山田庄北畑遺跡の井戸状遺構と類似する。甕前焼の碗や土鍋片が少量出土した。

土坑4 (第5・11図、図版2)

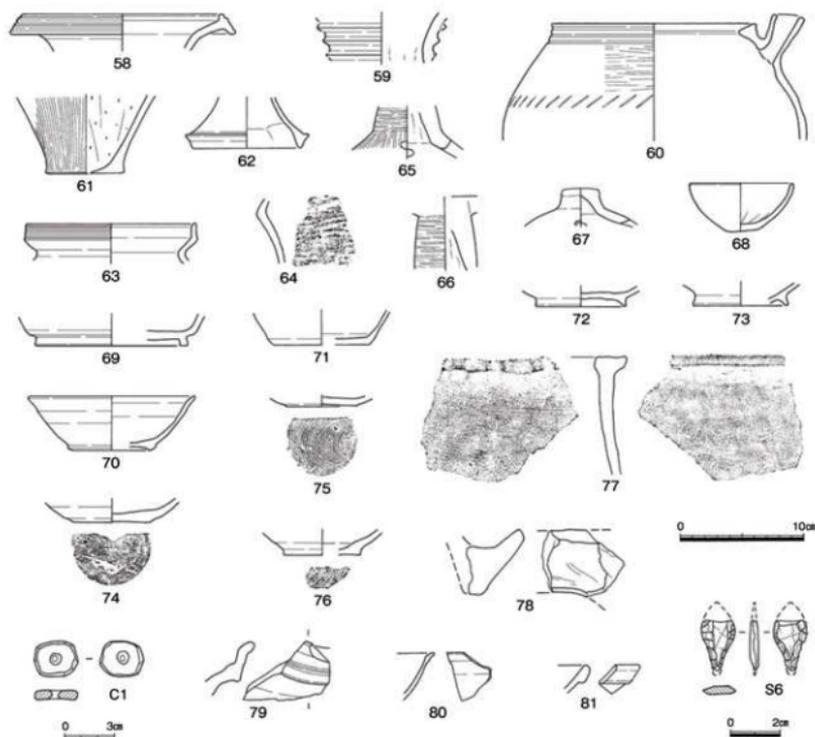
南トレンチの中央西よりにおいて南壁にかけ検出した土坑で、土坑2の南1mに位置する。北端をわずかに失い、南側も柱穴に斬られていることから全形は不明であるが、長さ1.5～2m、幅90cmの楕円形をなすものと思われる。深さ19cmにある底面は平坦で、標高1.55mを測る。埋土から土鍋片が出土しており、鎌倉時代のものと思われる。



第11図 土坑2～4 (1/30)、溝1 (1/50)・出土遺物 (1/4)

溝1 (第5・11図、図版5)

西トレンチの南壁にかけて検出したもので、南西側は土坑と重複している。埋土から鎌倉時代の土師器碗57や土鍋片が出土した。



第12図 その他の遺物 (1/4・1/3・1/2)

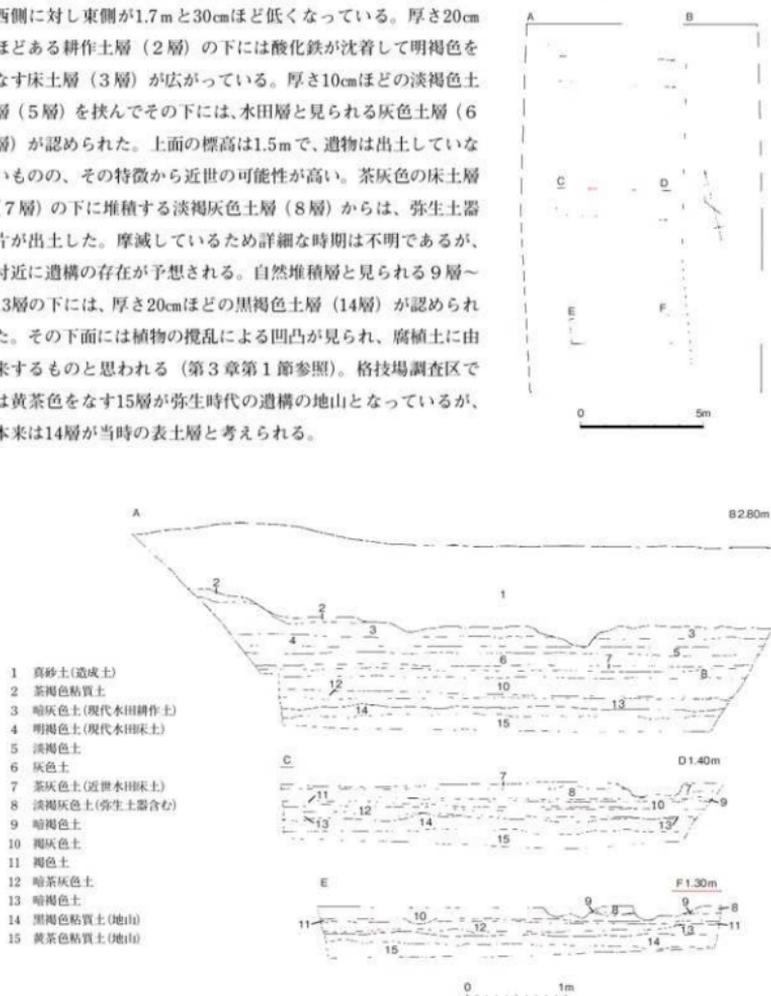
- 1 真砂土(造成土)
- 2 基礎掘り方
- 3 褐色土(造成土)
- 4 淡褐色土(水田層)
- 5 褐色土(土器含む)
- 6 褐色土
(黄色粘質土混じる)
- 7 褐色土
(黄色粘質土多く混じる)
- 8 灰色粘質土
- 9 灰黒色粘質土
- 10 暗褐色土(土器含む)
- 11 黄色粘質土(地山)

その他の遺構・遺物 (第12図、図版8)

柱穴から出土した遺物には、弥生土器の壺58・甕61のほか、須恵器の杯71や土師器の甕77、備前焼の碗75がある。60は弥生時代中期後葉の注口付鉢で、井戸1から出土したものと思われるが、他の弥生土器に比して器面の風化が著しい。表土掘削や遺構検出に際して出土した遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・備前焼・白磁のほか石器・土製品がある。63～68は古墳時代前期の土師器である。高杯の脚部は、杯部に差し込んで接合しており、外面にヘラ磨きを施し、裾部に円形の透かし孔を穿つ。甕には、口縁部に節描き沈線文を飾る63と、体部外面に平行叩きを施した64がある。69は須恵器の杯で、底部に断面矩形の高台を貼り付ける。72は外面に丹塗りを施した土師器の杯である。78は甕形土器の底と見られる。備前焼には底面を糸切りする碗74～76、片口を持つ播鉢79がある。白磁はいずれも碗で、口縁部が外反する80と玉縁となる81がある。C1は土器片を加工した有孔円板で重量4.0gを測り、S6は有茎式の石鏃で先端を欠いている。

第3節 合併処理槽調査区

調査地点は校地の南東隅に当たり、標高は2.5mを測る。15×10mの範囲を重機により掘削したところ、厚さ1m程の造成土（1層）の下から校地造成前の水田が現れた。その上面は、標高2.0mを測る西側に対し東側が1.7mと30cmほど低くなっている。厚さ20cmほどある耕作土層（2層）の下には酸化鉄が沈着して明褐色をなす床土層（3層）が広がっている。厚さ10cmほどの淡褐色土層（5層）を挟んでその下には、水田層と見られる灰色土層（6層）が認められた。上面の標高は1.5mで、遺物は出土していないものの、その特徴から近世の可能性が高い。茶灰色の床土層（7層）の下に堆積する淡褐色土層（8層）からは、弥生土器片が出土した。摩滅しているため詳細な時期は不明であるが、付近に遺構の存在が予想される。自然堆積層と見られる9層～13層の下には、厚さ20cmほどの黒褐色土層（14層）が認められた。その下面には植物の攪乱による凹凸が見られ、腐植土に由来するものと思われる（第3章第1節参照）。格枝場調査区では黄茶色をなす15層が弥生時代の遺構の地山となっているが、本来は14層が当時の表土層と考えられる。



第13図 合併処理槽調査区トレンチ配置図(1/200)・土層断面図(1/50)

第3章 総括

第1節 遺構・遺物をめぐる問題

1 「弥生の小海退」の痕跡

合併処理槽調査区では、標高0.8mの高さに広がる黒色土層が認められた（第14図14層）。厚さは20～30cmほどで、下面に見られる凹凸は、植物による土壌化の痕跡と考えられることから、腐植土をもとに形成されたものと思われる。この土層は、標高の高い格枝場調査区において確認できなかったものの、北西へ約3kmほど離れた瀬戸内市山田庄北畑遺跡でも確認しており（文献1）、吉井川によって形作られたこの自然堤防縁辺に広く遺存している可能性がある。

これとよく似た土層は、旭川下流域の岡山平野（岡山市域）でも認められる。半田山南麓の津島・北方遺跡群では弥生時代前期に開かれた水田の基盤となり、その南に位置する絵図遺跡や南方遺跡では弥生時代の集落や墓地の基層を構成している。また、操山北麓の百間川遺跡群や原尾島遺跡においても、弥生時代前期の集落や水田の基盤をなすことが確かめられている。その形成時期は、津島江道遺跡や津島岡大遺跡の調査成果から、縄文時代晩期末と推定された（文献2）。一方、岡山平野の形成について検討した鈴木茂之は、この黒色土を「弥生の小海退」によって安定した陸域に形成された泥炭層と理解し、 2670 ± 70 ・ 2790 ± 110 yrs BPという年代測定値を報告している（文献3）。

「弥生の小海退」の評価については未だ意見の一致をみていないものの、縄文時代晩期～弥生時代前期における海水準低下の痕跡は列島各地で指摘されている（文献4）。かつては初期水田との関わりが想定されたこともあったこの黒色土は（文献5・6）、当時の一般的な表土層であって稲作と直接関わりはないものの、その環境を知る重要な手がかりとして今後さらなる調査・検討が期待される。

2 井戸から環境を探る

格枝場調査区において弥生時代中期後葉の井戸1基を検出した。この周辺（瀬戸内市域）では、北へ約6km離れた熊山田遺跡で弥生時代中期の井戸1基、北に接する堂免遺跡で弥生時代中期の井戸4基、古墳時代初頭の井戸7基、西隣の助三畑遺跡で弥生時代中期の井戸2基、北西へ約3kmの位置にある山田庄北畑遺跡で弥生時代中期の井戸8基・後期の井戸5基、古墳時代中～後期の井戸10基と、多くの井戸が報告されている（文献7・8・9）。これらの大半は素掘りで、湧水の見られる砂層まで掘り抜いて地下水を集めている。深さは1～2mほどあり、時代による著しい差は認められない。井戸底の標高は、上流側の熊山田遺跡（弥生時代中期）で0.6m、自然堤防の中央に位置する堂免遺跡で0.2～0.7m（古墳時代初頭）、馬場崎遺跡で0.8m（弥生時代中期）、自然堤防の西端に当たる山田庄北畑遺跡で-0.4～-1.7m（弥生時代中期）を測る。

こうした井戸と竈穴住居との関係について、調査例の多い旭川流域を見ると、住居床面と井戸底との比高差は1.5mほどで、1m未満になることはないようだ。深さが1mにも満たない井戸が検出され

た岡山市百間川今谷遺跡・田益新田遺跡では竪穴住居が設けられておらず、代わって掘立柱建物が多く見受けられる。百間川今谷遺跡では掘立柱建物を工房と考え、井戸はそこで行われた生産活動に関わるものと推定されているが、その当否はともかく、半地下式の住まいを営むには不向きな場所であったに違いない。また、百間川原尾島遺跡・伊福定国前遺跡の竪穴住居では、井戸底との差が1mに満たない柱穴に礎板が確認されており、地下水位の高い軟弱な地盤であったことをうかがわせる。こうした環境ではもちろん、貯蔵穴を設置することは困難である。翻って馬場崎遺跡の井戸を検討すると、検出面から深さ0.8mにある井戸底の標高は0.8mを測る。付近に竪穴住居が存在していたとすると大幅な削平を想定しなければならないが、同時期の土坑1が遺存することを考えればその可能性は少ない。弥生時代にさかのぼる柱穴が見られないことからしても、この場所は助三畑遺跡を中心とする居住域の西縁と考えた方がよさそうだ。

ところで井戸は、弥生時代中期～古墳時代前期にかけて盛行するが、5世紀に入ると著しく減少する。耐久性のある構造に変化したわけではなく、家族単位から集落単位へ集約されたということでもなさそうだ。一体、井戸のある集落は河口付近の三角州に立地し、地下水位が比較的高い場所にある。しかも、河道や水路に接し、周辺には水田が開かれるなど、地表水を得やすい環境と言える。にもかかわらず、あえて井戸が掘削された理由は、そこから得られる水に生活用水以上の特別な価値を見出したからではなかろうか。井戸と言えば廃棄における儀礼ばかりが注目されているが、井戸を掘ること自体が祭祀的行為であったと考える。弥生時代から行われてきた井戸を掘る習俗は、渡来系の新しい生活文化が普及するとともにその終焉を迎えたのだろう。

3 瓦器碗からみた備前

格技場調査区の土坑2から和泉型の瓦器碗4点が、土師器の杯・皿とともに出土した。県内における瓦器碗の出土状況を見ると、吉井川下流域で14遺跡、砂川流域で4遺跡、旭川下流域で16遺跡、高梁川（足守川・新本川）下流域で7遺跡、沿岸部・島嶼部で7遺跡、中国山地で1遺跡の計49遺跡を数える（文献10・11ほか）。このうち、楠葉型の出土遺跡は8遺跡で、津山市美作国府跡や赤磐市馬屋遺跡、岡山市百間川米田遺跡・鹿田遺跡・津寺遺跡・川入中撫川遺跡といった官衙や荘家と見られる遺跡に限られるが、これは楠葉型の流入時期が11世紀中葉～12世紀初頭（橋本編年のI期）と、12世紀後半～14世紀前半（尾上編年のII～III期）を中心とする和泉型より古いことと関わっているように思われる。瓦器碗の大半を占める和泉型は、備前に属する吉井川下流域の助三畑遺跡や旭川河口近くの百間川米田遺跡・鹿田遺跡といった流通拠点とその周辺に多数集積されるが、備中南部に当たる足守川下流域では極めて少ない。

この点について、中世の土器碗を祭祀にかかわるうつわと理解する草原孝典は、吉備津神社が信仰される備中で吉備系土師器碗が主に用いられ、瓦器碗は受け入れられなかったと主張する（文献12）。土器碗を非日常的な食器とする見方はすでに鈴木康之も述べているが、特定の信仰に関わるものではなく、饗宴や葬送、呪術などの儀礼で広く使用されたと考えている（文献13）。いずれにしても、碗形土器の粗製化・小型化は須恵器碗や瓦器碗などにおいてもみられる傾向であり、これら全てを同様に理解してよいのかどうか疑問が残る。瓦器碗の分布は、商品として流通した輸入陶磁器のそれとは異なり、これを携行した人びと（主に和泉～摂津の商人たち）の足跡である。やや時代が下るが、文安2～3（1445～1446）年の「兵庫北関入船納帳」に見える船籍地は、備前の13港（牛窓、下

津井、伊部、番田、大島、日比、八浜、虫上、宇野、郡、日那志、片上、阿津) 246艘に対して備中は5港(連島、南浦、笠岡、舟穂、西宛) 61艘に過ぎず、備後や讃岐と比べても少ない(文献14)。瓦器碗の備前への集中は、12世紀末に東大寺再興の料国として開発が進められて以降、この地域が流通の拠点として人や物の往来が盛んになったことの反映と評価しておきたい。

文献

- 1 亀山行雄「熊山田散布地」『岡山県埋蔵文化財報告23』岡山県教育委員会、1993
- 2 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「シンポジウム『水稲農耕のはじまりを考えるー岡山平野の水田研究ー』の発表記録」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011』2013
- 3 鈴木茂之「岡山平野における最終氷期最盛期以降の海水準変動」『岡山大学地球科学研究報告』11 岡山大学理学部、2004
- 4 太田陽子・海津正倫「日本における完新世相対的海面変化とそれに関する問題」『第四紀研究』29 第四紀研究会、1990
- 5 高橋 護「縄文時代中期稲作の探求」『堅田直先生古希記念論文集』堅田直先生古希記念論文集刊行会、1997
- 6 草原孝典「集落遺跡からみた吉備の水田経営」『吉備弥生社会の新実像』考古学研究会、2013
- 7 邑久町教育委員会「熊山田遺跡」『邑久町埋蔵文化財発掘調査報告』1 2004
- 8 瀬戸内市「邑久町史 考古編」2009
- 9 瀬戸内市教育委員会「山田庄北畑遺跡」『瀬戸内市埋蔵文化財発掘調査報告』4 2015
- 10 橋本久和「瓦器碗の分布」『中世土器研究学論』真陽社、1992
- 11 橋本久和「備前南部の瓦器碗」『概論 瓦器碗研究と中世社会』真陽社、2013
- 12 草原孝典「吉備地域の瓦器碗からみた中世前半期の流通関係」『中近世土器の基礎研究』23 日本中世土器研究会、2011
- 13 鈴木康之「中世土器の象徴性ー「かりそめ」の器としてのかわけー」『日本考古学』14 日本考古学協会、2002
- 14 林家辰三郎「兵庫北関人船納帳」中央公論美術出版、1981

第2節 発掘された地震痕跡

1 発掘された地震痕跡

発掘調査において、ごくまれに砂が詰まった地割れを観察することがある。これを、地震によって引き起こされた液状化現象（地下水を含んだ砂礫層が、震度5以上の震動により液状化して地割れに入り込み、時には地表へ噴出する現象）と関連づけて捉えたのは馬場崎遺跡が最初である。そこで、これまでに県内で発掘された地震痕跡について簡単に触れておきたい。

瀬戸内市馬場崎遺跡

格技場調査区の北トレンチ東端で、南西から北東へ30cmほどの間隔を保って並走する幅約10cmの地割れを3.6mにわたって検出した。その土層断面を観察したところ、地割れに詰まった砂は南トレンチの井戸1下層で確認した湧水層となる砂層と連続していることが判明した。

地割れ（砂脈）は、江戸時代のものと思われる水田層を除去したところで検出しており、鎌倉時代の柱穴を壊していることから、江戸時代から室町時代の間に形成されたものと思われる。



第14図 馬場崎遺跡の地震痕跡

岡山市百間川米田遺跡（文献1）

旭川支流の河口近くに営まれた縄文時代～江戸時代にかけての集落跡で、古代～中世には備前国府の外港としての役割を果たしていたものと思われる。岩間下調査区で検出した幅約20m、深さ2.6mの旧河道（河道6）を掘り下げる過程で、地割れの痕跡を確認した。その規模や走向は明らかではないが、酸化鉄が付着した地割れには砂が詰まっており、砂脈と考えられる。

この砂脈は、河道内に堆積した13～17世紀代のシルト層を貫いていることから、17世紀以降に形成されたものと思われる。

総社市総社遺跡（文献2）

高梁川支流が形成した自然堤防上に営まれた総社遺跡は、総社平野のほぼ中央に位置している。戦国時代の居館西辺を区切る、幅9.8m、深さ2.2mの堀（堀1）の法面において、礫が集中する箇所を確認した。堀に直交して東西に走るこの礫群は、断面が上幅67cm、深さ70cmの逆三角形を呈し、上端は水平に終わっている。礫の大きさは最大30cmを測り、基盤層下部に堆積した礫が大規模な地震動によって噴出したものと考えられる。縄文時代晩期を上限とする遺跡の基盤層中に存在することから、形成はそれ以前と推定できる。



第15図 総社遺跡の地震痕跡

なお近年、地震痕跡として大阪府讃良郡条里遺跡の事例が関心を集めている（文献3）。これは、江戸時代の水田層上に堆積した砂礫が地震の震動によって沈み込み、水田面に直径10cm、深さ8cmほど

の小穴群を形成したというもので、そのあり方が、これまで「稲株痕跡」と報告されてきたものとよく似ていることから、その関係が注目されている。しかし岡山市百間川遺跡群では、水田層の上部に砂礫層は見られず、沈み込みを示すような堆積層の変形も今のところ確認できない。これについては、今後の検討を待ちたい。

2 液状化現象の記録

岡山県を震源とする地震は、鳥取県境で起こった宝永7（1710）年の地震を除けばほとんど知られていない。しかし、南海トラフを震源とする宝永4年の宝永地震や安政元（1854）年の南海地震では大きな被害を受けており、液状化現象の記録も散見される（文献4・5）。

『池田家履歴略記』に見える宝永地震の記事には「殊に西大寺町の道一尺ばかり破裂し、泥沸き出る」、笠岡市大津屋安兵衛の『備中小田郡笠岡村控』に見える安政地震の記事には「その方段々地われより砂だべふきだし、陣屋道にてだべふき上げめずらしき事大変なり」、赤磐市高屋の名主であった花房銀三郎の『地震日記』には「割れ目付き候ところよりは青どべ吹き出し、又はどろ水吹き上げ麦田を水流れ」、倉敷市川入の庄屋秋岡惣五郎が記した『先考遺筆』には「田の中に青土吹き出し居り申すに付き、見物に参り候所、所々に穴明き吹き出し申し候由、吹き出す時は凡そ二、三尺も吹き上げ申し候、その穴へ三間くらいの棒は少しも障りなしに這入り申し候」とある。

このように、吉井川や旭川、足守川下流域の沖積平野は地震動による液状化を生じやすい環境にあるようで、発掘された地震痕跡もこうした現象が繰り返し起こっていたことを示している。近い将来に発生が予想されている東・南海地震に向けて、十分な備えが急がれる。

なお本稿は、1の百間川米田遺跡・総社遺跡を物部茂樹が、その他を亀山が執筆した。

文献

- 1 物部茂樹・宇垣匡雅ほか「百間川米田遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』164 岡山県教育委員会、2002
- 2 宇垣匡雅・物部茂樹ほか「総社遺跡・金井戸遺跡・北溝手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』209 岡山県教育委員会、2007
- 3 中尾智之・山根航ほか「讃良郡条里遺跡Ⅶ」『大阪府文化財調査センター調査報告書』第187集 財団法人大阪府文化財センター、2009
- 4 柴田 一「第4部第6章第2節3 地震」『邑久町史 通史編』瀬戸内市、2009
- 5 岡山県備前県民局「岡山県南部における南海地震の記録—昭和南海地震・安政南海地震—」2007

遺物観察表

土器・陶磁器

発掘 番号	地区名	遺構名	種類	器種	計測値 (cm)				色調	胎土	保存	備考	
					口径	最大径	底径	器高					
1	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	15.6				(1.3) 浅黄褐色(10YR8/4)	0.5mmの砂粒	口縁部1/8		
2	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	10.6				(4.9) 灰黄褐色(10YR6/2)	1mm以下の砂粒	口縁部1/3	陶磁文	
3	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	14.6				(8.4) 浅黄褐色(10YR8/3)	1mm以下の砂粒	口縁部1/2	陶磁文	
4	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	9.0	12.2	6.2	11.3	にぶい黄褐色(10YR7/3)	0.5-1mmの砂粒	1/2	尊孔2対	
5	格枝場南	井戸1	弥生土器	白付甕	6.0	15.3	7.8	19.6	灰黄色(2.5Y7/2)	0.5-2mmの砂粒	胴部一部欠	円板充填	
6	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	18.2				(8.0) 灰黄色(2.5Y6/2)	1-4mmの砂粒	胴部1/4		
7	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	21.4		7.6	(18.3)	灰白色(10YR8/2)	0.5-2mmの砂粒	胴部1/2		
8	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	16.4	31.0			(27.0)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	0.5-1mmの砂粒	口縁部1/3	陶磁文
9	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	22.2				(7.5)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	0.5-1mmの砂粒	口縁部1/4	陶磁文
10	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	23.2	35.2			(15.9)	灰黄色(2.5Y7/2)	1mm以下の砂粒	口縁部1/2	陶磁文
11	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	14.8	22.4			(23.3)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	0.5mm以下の砂粒	1/2	陶磁文
12	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	14.8	20.9			(16.0)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	1-2mmの砂粒	胴部1/2	陶磁文
13	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	16.0	20.8			(12.3)	灰白色(2.5Y7/1)	0.5-2mmの砂粒	1/3	陶磁文
14	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	11.7	16.4			(10.0)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	0.5mmの砂粒	口縁部1/4	陶磁文
15	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	14.0				(6.3)	にぶい赤褐色(5YR5/4)	0.5mm以下の砂粒	口縁部1/4	陶磁文
16	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	12.7				(5.3)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	0.5mmの砂粒	口縁部1/2	陶磁文
17	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	12.8	16.4			(10.9)	灰黄色(2.5Y7/2)	0.5-2mmの砂粒	口縁部1/2	陶磁文
18	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	13.0	18.4			(17.0)	にぶい褐色(7.5YR7/4)	0.5mmの砂粒	底面欠	陶磁文
19	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	13.8	20.0	5.6	27.4	にぶい褐色(7.5YR7/4)	0.5-1mmの砂粒	1/2	底部穿孔	
20	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	13.8				(5.8)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	0.5mmの砂粒	口縁部1/3	陶磁文
21	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	14.3	19.8			(17.2)	にぶい褐色(7.5YR7/4)	1mm以下の砂粒	底面欠	
22	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	13.4				(5.2)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	0.5mm以下の砂粒	口縁部1/4	
23	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	13.5	20.4	5.6	27.7	にぶい黄褐色(10YR5/3)	0.5-3mmの砂粒	ほぼ方形	底部穿孔	
24	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	14.8				(5.8)	灰黄褐色(10YR6/2)	0.5mm以下の砂粒	口縁部1/5	
25	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	13.6	19.4			(13.6)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	1mm以下の砂粒	口縁部1/2	
26	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	14.6	18.0			(11.3)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	1mm以下の砂粒	口縁部1/3	
27	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	15.2	19.6			(11.6)	にぶい褐色(7.5YR6/4)	1-2mmの砂粒	口縁部1/5	
28	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕			6.0	(11.6)	灰黄褐色(10YR6/2)	1-4mmの砂粒	底面1/1	底部穿孔	
29	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕			9.4	(8.1)	にぶい褐色(7.5YR7/4)	0.5-1mmの砂粒	底面2/3		
30	格枝場南	井戸1	弥生土器	甕	19.4	5.4	20.0		(20.0)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	1-2mmの砂粒	胴部1/2	
31	格枝場南	井戸1	弥生土器	鉢	24.4	30.4			(24.5)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	0.5-2mmの砂粒	1/2	陶磁文
32	格枝場南	井戸1	弥生土器	高杯	21.2				(4.7)	にぶい黄褐色(10YR7/4)	0.5mm以下の砂粒	口縁部1/3	陶磁文
33	格枝場南	井戸1	弥生土器	高杯	19.6				(3.3)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	1mm以下の砂粒	杯部1/8	陶磁文
34	格枝場南	井戸1	弥生土器	高杯	20.8				(12.6)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	0.5-2mmの砂粒	脚部部欠	円板充填
35	格枝場南	井戸1	弥生土器	高杯	8.4				(6.3)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	1mm以下の砂粒	口縁部1/4	
36	格枝場南	井戸1	弥生土器	高杯			9.2	(4.2)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	0.5-1mmの砂粒	脚部部1/3		
37	格枝場南	井戸1	弥生土器	高杯			8.2	(8.6)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	1mm以下の砂粒	杯部欠	円板充填	
38	格枝場南	井戸1	弥生土器	高杯			8.6	(8.7)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	0.5-1mmの砂粒	脚部部1/6	円板充填	
39	格枝場南	土坑2	弥生土器	甕				(4.2)	灰白色(2.5Y7/1)	0.5mm以下の砂粒	小片	構造文	
40	格枝場南	土坑2	弥生土器	甕	13.3				(4.0)	にぶい褐色(5YR6/4)	0.5mmの砂粒	口縁部1/6	陶磁文
41	格枝場南	土坑2	弥生土器	甕		20.4			(15.5)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	0.5-2mmの砂粒	胴部1/4	
42	格枝場南	土坑2	弥生土器	甕			6.6	(3.0)	灰黄褐色(10YR5/2)	0.5-2mmの砂粒	底面1/4		
43	格枝場南	土坑2	弥生土器	甕	17.6				(4.8)	灰黄褐色(10YR6/2)	0.5-1mmの砂粒	口縁部1/9	陶磁文
44	格枝場南	土坑2	弥生土器	甕	15.4				(5.8)	灰黄褐色(10YR5/2)	0.5mm以下の砂粒	口縁部1/4	陶磁文
45	格枝場南	土坑1	弥生土器	高杯	20.3				(4.1)	灰黄褐色(10YR4/2)	0.5mm以下の砂粒	口縁部1/5	陶磁文
46	格枝場南	土坑2	弥生土器	高杯	18.0				(3.7)	にぶい黄褐色(10YR6/3)	0.5mmの砂粒	口縁部1/10	
47	格枝場南	土坑2	弥生土器	高杯			10.2	(4.4)	褐色(10YR1/4)	0.5mm以下の砂粒	脚部部1/5		
48	格枝場南	土坑1	瓦器	椀	15.2		5.0	5.6	灰色(N4/)	精良	2/3	和泉型Ⅱ期	
49	格枝場南	土坑1	瓦器	椀	15.4		5.0	5.6	灰白色(2.5Y7/1)	精良	1/2	和泉型Ⅱ期	
50	格枝場南	土坑1	瓦器	椀	15.0		5.0	5.3	灰白色(2.5Y7/1)	精良	方形	和泉型Ⅱ期	
51	格枝場南	土坑1	瓦器	椀	15.6		5.0	4.7	灰白色(5Y7/1)	精良	口縁部1/4	和泉型Ⅱ期	
52	格枝場南	土坑1	土師器	杯	15.4		9.6	3.2	浅黄褐色(7.5YR8/6)	0.5mm以下の砂粒	口縁部1/3		
53	格枝場南	土坑1	土師器	小皿	7.8		5.4	2.0	にぶい黄褐色(10YR7/2)	0.5mm以下の砂粒	方形	底部へう切	
54	格枝場南	土坑1	土師器	小皿	8.2		5.7	1.9	褐色(7.5YR7/6)	0.5mmの砂粒	方形	底部へう切	
55	格枝場南	土坑1	土師器	小皿	8.4		6.2	1.2	にぶい黄褐色(10YR6/4)	精良	口縁部欠	底部へう切	
56	格枝場南	土坑1	土師器	小皿	8.6		6.9	1.9	にぶい黄褐色(10YR6/3)	0.5-2mmの砂粒	方形	手控	
57	格枝場北	溝3	土師器	椀	12.8				(2.6)	灰白色(2.5Y8/2)	精良	口縁部1/8	早島式土器
58	格枝場北	P31?	弥生土器	甕	15.8				(3.0)	にぶい黄褐色(10YR7/2)	0.5-1mmの砂粒	口縁部1/8	陶磁文
59	格枝場南	包舎跡	弥生土器	甕					(4.1)	にぶい黄褐色(10YR6/4)	0.5-1mmの砂粒	胴部1/3	変形貼付け
60	格枝場南	井戸1?	弥生土器	注口鉢	16.2	24.6			(10.2)	にぶい褐色(7.5YR6/4)	0.5-2mmの砂粒	口縁部1/8	陶磁文
61	格枝場北	P31?	弥生土器	甕			6.2	6.3	にぶい褐色(7.5YR7/3)	0.5-3mmの砂粒	底面1/2	底部穿孔	

掲載番号	地区名	遺構名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	胎土	保存	備考
					口径	最大径	底径				
62	格枝場南	包含層	養生土層	高杯			8.6	(4.1)	浅黄色 (2.5Y7/3)	0.5mm以下の砂粒	脚部部1/3
63	格枝場南	包含層	土師器	甕	13.4			(3.2)	にがい褐色 (7.5YR6/4)	0.5mmの砂粒	口縁部1/8
64	格枝場南	包含層	土師器	甕				(5.3)	淡赤褐色 (2.5YR7/4)	1mmの砂粒	小片
65	格枝場南	表土除去	土師器	高杯				(4.2)	にがい褐色 (7.5YR5/4)	精良	脚部部1/2
66	格枝場南	包含層	土師器	高杯				(6.1)	にがい褐色 (7.5YR5/4)	精良	脚部部1/3
67	格枝場南	包含層	土師器	高杯				(3.2)	褐色 (5YR6/8)	精良	脚部部1/2
68	格枝場南	包含層	土師器	鉢	8.1		2.6	3.9	褐色 (5YR7/6)	0.5-1mmの砂粒	完好
69	格枝場南	包含層	須恵器	杯			12.0	(2.5)	灰色 (5Y6/1)	0.5-2mmの砂粒	高台1/6
70	格枝場南	包含層	須恵器	杯	13.2		6.0	4.4	灰黄色 (2.5Y6/2)	精良	1/2
71	格枝場北	P29	須恵器	杯			7.8	(2.8)	灰色 (5Y5/1)	0.5mmの砂粒	底部1/3
72	格枝場南	包含層	土師器	杯			7.0	(1.6)	褐色 (7.5YR7/6)	0.5-2mmの砂粒	高台1/2
73	格枝場南	包含層	須恵器	杯			7.6	(1.8)	灰白色 (2.5Y7/1)	1mm以下の砂粒	高台1/4
74	格枝場南	包含層	甕前焼	甕			6.4	(1.9)	灰黄色 (2.5Y7/2)	0.5mmの砂粒	底部1/2
75	格枝場南	P3	甕前焼	甕			5.8	(0.8)	灰白色 (5Y8/1)	精良	底部2/3
76	格枝場南	包含層	甕前焼	甕			6.2	(2.0)	灰黄色 (2.5Y6/2)	0.5mmの砂粒	底部1/6
77	格枝場北	P1	土師器	甕			9.5	(5.5)	灰黄褐色 (10YR6/2)	1mmの砂粒	小片
78	格枝場南	包含層	土師器	甕				(5.3)	褐色 (5YR6/6)	1mmの砂粒	小片
79	格枝場南	包含層	甕前焼	甕鉢				(4.7)	灰褐色 (5YR5/2)	1mmの砂粒	小片
80	格枝場南	包含層	白磁	甕				(4.0)	灰白色 (10Y8/1)	精良	小片
81	格枝場南	包含層	白磁	甕				(2.3)	灰白色 (5Y7/1)	精良	小片

石製品・土製品

掲載番号	調査区	遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	材質	時期	備考
				長さ	幅	厚さ				
S 1	格枝場南	井戸1	石包丁	(7.6)	(6.1)	1.4	(70.2)	サヌカイト	弥生中期	欠損
S 2	格枝場南	井戸1	石包丁	9.8	4.5	0.7	(38.4)	サヌカイト	弥生中期	欠損
S 3	格枝場南	井戸1	石包丁	(6.8)	3.8	0.9	(30.0)	サヌカイト	弥生中期	欠損
S 4	格枝場南	井戸1	石包丁	(2.0)	(4.2)	(0.6)	(5.4)	サヌカイト	弥生中期	欠損
S 5	格枝場南	井戸1	石鏝	2.6	1.1	0.5	1.3	サヌカイト	弥生中期	
S 6	格枝場南	包含層	石鏝	(2.0)	1.3	0.6	(1.0)	サヌカイト	弥生中期	欠損
C 1	格枝場南	包含層	土製円板	2.6	2.2	0.5	4.0	養生土層	弥生中期	両面穿孔

文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財発掘の通知 (法第57条の3)

番号	文書番号 目付	種類および名称	所在地	面積 (㎡)	目的	届出者	指示事項
1	教文理 第51号 H5.4.1	散布地 岡山山散布地	邑久郡邑久町尾張404	365	校舎建設	岡山県教育委員会教育長	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の通知 (法第98条の2)

番号	文書番号 目付	種類および名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期 間
1	教文理 第750号 H5.4.23	集落跡 馬場崎跡跡	邑久郡邑久町尾張404	215	格枝場建設	岡山県古代古蹟文化財センター所長	宇治区雅・亀山行徳	H5.4.19～6.15

埋蔵文化財発見の通知 (法第100条の2)

番号	文書番号 目付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現状保管場所
1	教文理 第3008号 H5.6.16	養生土層・須恵器・中世土器 7點、石器・鉄鏝他5点	邑久郡邑久町尾張404	H5.4.19～5.21	岡山県教育委員会教育長	岡山県知事	岡山県古代古蹟文化財センター

報告書抄録

ふりがな	ばばごきいせき							
書名	馬場崎遺跡							
副書名	県立邑久高等学校格技場・合併処理槽建設に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山原埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	251							
編著者名	亀山行雄、物部茂樹							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL.086-293-3211 URL: https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL.086-224-2111							
発行年月日	2020年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° , ' , "	東経 ° , ' , "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ばばごきいせき 馬場崎遺跡	岡山県 瀬戸内市 邑久町 尾張404	33212	33212233	34° 39' 45"	134° 5' 30"	19930419 ～ 19930521	215㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
馬場崎遺跡	集落	弥生時代		井戸、土坑		弥生土器・石器・土製品		
		古墳時代				土師器		
		奈良～平安時代				土師器・須恵器		
		鎌倉時代		土坑、溝、柱穴		土師器・瓦器・陶磁器		
要約	<p>弥生時代から鎌倉時代にかけての集落遺跡。弥生時代中期の土器が廃棄された井戸や鎌倉時代の土器がまとめて出土した土坑などを検出。東側の助三畑遺跡と一連の集落と考えられる。</p> <p>このほか、江戸時代の水田層下で検出した砂の詰まった地割れは、地震による液状化の痕跡として注目される。</p>							

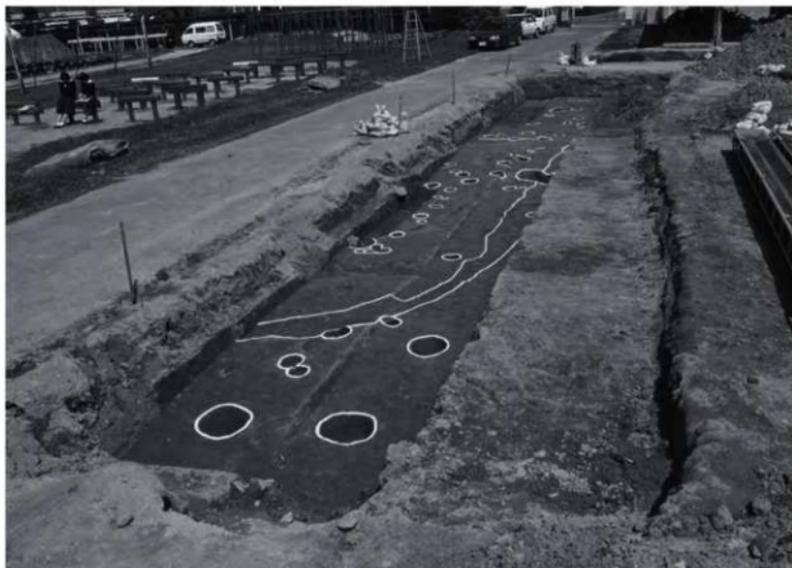


1 格技場調査区全景（西から）



2 格技場調査区調査状況（南東から）

図版 2



1 格技場調査区北トレンチ全景 (西から)



2 格技場調査区南トレンチ全景 (南東から)



1 井戸 1 遺物出土状況 (北東から)



2 井戸 1 完掘状況 (北東から)

図版 4



1



2



3



4

1 土坑1 (北東から)
3 土坑2上層 (南西から)

2 土坑3 (北東から)
4 土坑2下層 (南西から)



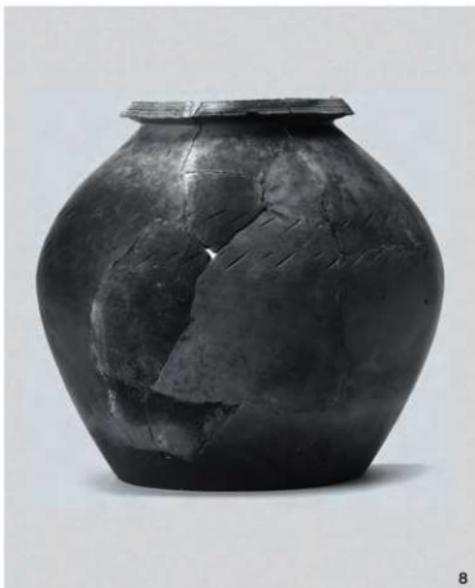
5 格技場調査区西トレンチ全景 (北西から)

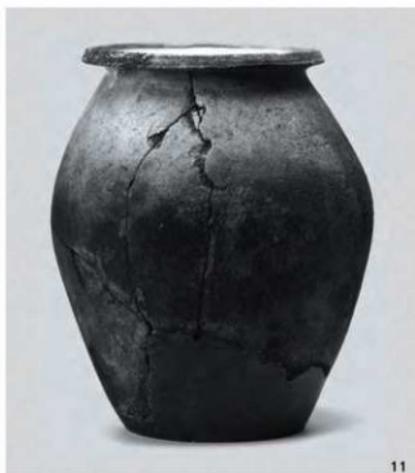


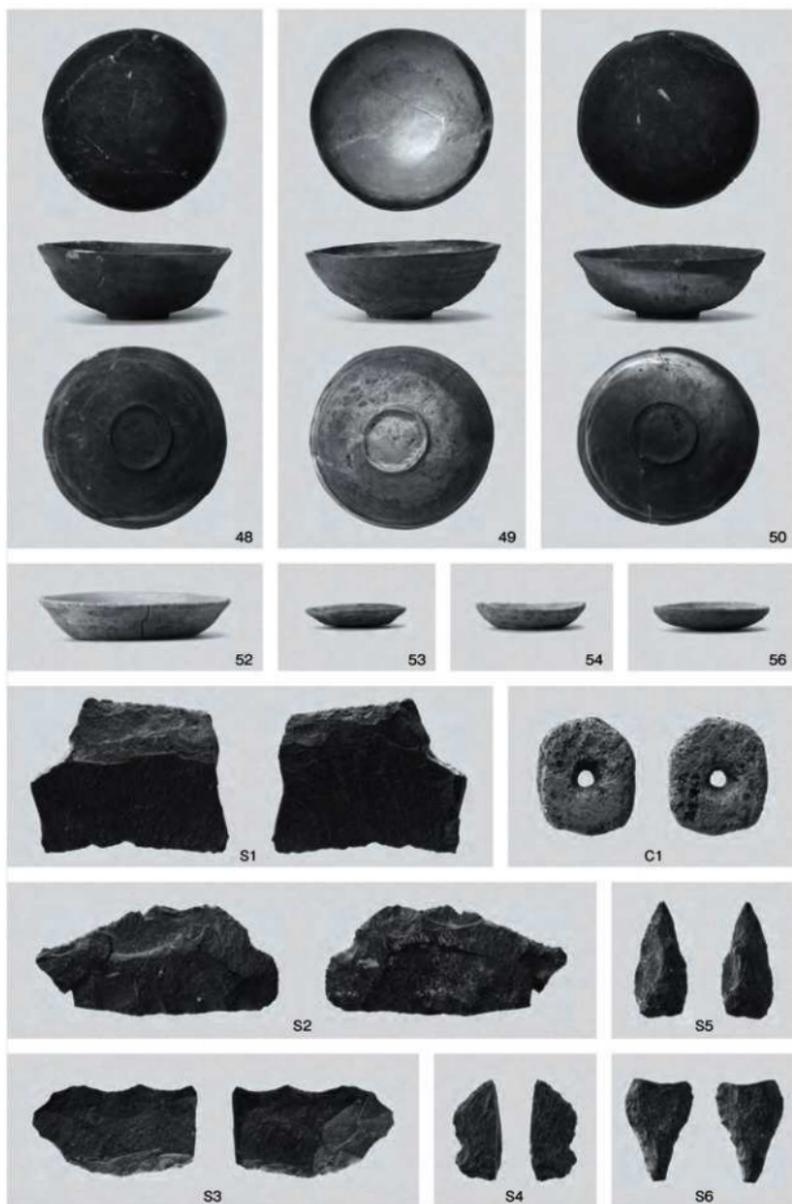
1 合併処理槽調査区調査状況 (北から)



2 合併処理槽調査区土層断面 (北西から)







岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 251

馬場崎遺跡

県立邑久高等学校格技場・合併処理槽建設
に伴う発掘調査

令和2年3月19日 印刷

令和2年3月19日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市駅南一丁目1-5

